

2009年6月6日の読売新聞に、北九州市に住む一人暮らしの39歳の男性が自宅で孤独死した記事が掲載された。男性は勤務していた飲食店を辞めたあと、生活保護の申請を相談していたらしいが、受給には至らなかった。部屋の冷蔵庫は空であり、食べ物も全くなく、死因は病死とみられていた。

事件は、NHKの番組でも取り上げられ、その内容は「助けてと言えない～いま30代に何が」(文藝春秋)にまとめられた。男性は正社員として勤務していたが、過酷な労働で体調を崩し、退職に追い込まれた。その後何度も転職を余儀なくされ、兄からの金銭的援助を受けたものの、生活が好転することはなかった。取材班によると、男性は飲食店を自ら辞め、その後餓死で死亡したという。

本書を読み進めていくと、複数の路上生活者が登場する。いずれも30代男性である。生活困窮の原因は、雇用情勢が関係している。だが、それよりも本書が指摘するのは、先の男性同様、なぜ、生活が困窮状態に陥っても家族や友人など、身近な人に助けを求めないのか、ということである。彼らは取材班に対し、問題を自己責任と考え、自分で何とかする、家族に心配をかけたくない、話しても解決に至らない、友達の負担になるなど、複雑な心情を語っていた。長年、路上生活者を支援する団体の代表は、彼らは「強いプライド」があるが、「簡単に孤立状態に陥る」とし、伴走型の支援者の必要性を説いている。

客観的に見れば、30代の餓死者が増加しているわけではないが、路上生活者は増加している。経済のみならず、精神的な支援を必要としているのである。本書はその現状を理解する一冊となるであろう。なお、生活困窮の問題は複雑であり、多角的に考察する必要がある。そのためには、次の図書も参考にしてほしい。

ルポ若者ホームレス 飯島祐子、ビッグイシュー基金著 ちくま新書 2011 (368.2:I27)

若者が無縁化する 宮本みち子著 ちくま新書 2012 (367.68:Mi77)

論争 若者論 文春新書編集部編 文藝春秋 2008

* 上記2冊は当館にも所蔵しております。請求記号はカッコ書きを参照のこと。